



ロバート・キャンベルさん

Robert Campbell

1957年アメリカ・ニューヨーク生まれ。東京大学大学院総合文化研究科教授。文学博士（日本文学専攻）。カリフォルニア大学バークレー校卒業、ハーバード大学大学院東アジア言語文化学科博士課程修了。大学3年の時に語学留学生として初来日、すっかり日本に魅せられる。いったん帰国するも九州大学文学部に留学生として1985年に再来日。以後日本に暮らす。九州大学文学部講師、国文学研究資料館助教授を経て現職。テレビ番組にも多数出演。

高円寺はニューヨーク！？



杉並・中央線沿線は昔ながらの商店街や建物があって面白いですね。中央線の駅をアメリカの都市に置きかえてみると、「高円寺」にはサブカルチャーがあり、若者が色々なことをやっている部分がニューヨークのSOHO（注釈：1）に似ています。かたや「荻窪」は商業的に発展しているけれど、古くからそこで

営んでいる商店街があるからイメージ的にはシカゴかな。一方杉並区役所のある「阿佐谷」は政治の都、ワシントンD.C.。24時間利用できる郵便局や警察署、商店街があり、秋には阿佐谷ジャズストリートもある。阿佐谷がワシントンというのは意外な感じかもしれませんが、高円寺、荻窪と比べると行政というイメージが強い。なんてこれは僕の独自な見方なのですが（笑）。こんな遊び心を入れて自分の住んでいる街をしてみるのも楽しいでしょ。

写真：高円寺

暗渠（あんきょ）を散策する贅沢

杉並に住んで11年目になりますが、杉並には古いものが残っているところが気に入っています。

たとえば阿佐谷から荻窪を東西に暗渠（注釈：2）がありますが、そこを散歩するのが好き。暗渠と知らずに歩くとただの敷石が敷かれたひなびた路地にしか見えないかもしれませんが、そこは車も入ってこない。まさしくタイムスリップした空間。文献を読むと昭和初期にはすで

に水路は住宅地の裏を流れるようになっていたようですが、暗渠にはその名残が残っているのが感じられます。ITで発達した現代に「暗渠」を散策する。これはある意味とても贅沢ですよ。杉並区は戦前の建物が多く残っていますが、戦後の建物では阿佐ヶ谷住宅が好きですね。ここ一年ほど足を運んでいないのですが、サンルームをそれぞれ改築したり、2階にサンデッキを作ったり。オリジナルティのある「住まい」を引き継がせていく部分には日本の古き良き時代を感じます。

写真上：上井草付近の暗渠

写真中：阿佐ヶ谷住宅

写真下：阿佐ヶ谷団地



惹きつけられるように日本へ

初めて日本に来たのは大学3年の時です。アメリカとカナダの大学が協力して作っている日本語学習機関「日本研究センター」に1年間語学留学しました。大学院生がほとんどだったのですが、ラッキーなことに僕は学部生で行くことができました。この日本滞在中に、心を揺さぶるような書物との出会い、それに加えて文学や古典芸能にかかわる人々に出逢うことができました。もともと言葉を介して、色々な人たちがユーモアとか…をどう表現してきたのかということに関心があったのですが、

すっかり日本に魅せられ、将来は日本にかかわる仕事はしたいなと思い始めました。

悩める学生時代が今の自分を形成

といっても、日本で生涯を送るということは全く想像していなかったですね。

当時は都市計画、経済、建築という「ビジュアルな都市空間と人の暮らし」などにも関心がありましたし、とにかく進路については悩みました。ありがたいことにアメリカの大学システムは様々なことが選択できるようになっていて、日本のように大学3年生から就活で時間をとられるということはありません。4年の間、しっかり勉強して将来についても悩むことができるんです。この悩める時間というのが後々大変役立ったと思っています。アメリカで博士論文を書き上げた後、僕はアメリカで就職をするという道ではなく日本に留まることを選択しました。27歳の時です。

幼い頃から異文化に関心を持っていた

僕の祖父母はアイルランドからの移民で、僕は少年時代はニューヨークのヤンキー・スタジアムに近いブロンクス地区で育ちました。まさに人種のるつぼといった場所。ある意味でサバイバル。様々なコミュニティがあり、子どもたちはそれに守られてはいるものの、一歩外に出るとアンテナをはっていないとやっていけない。ぼんやり街を歩くなんて論外。自分の身を守る術も自然と身につきました。その後高校生の時に両親の仕事の都合でサンフランシスコに。通った高校にはアジア、特に中国系の学生が多かったのですが、言葉、笑うツボも微妙に違っていることにおもしろさを感じ、高校では中国語を少し勉強。言葉ができる心がもう少し通じるのかなと思って。アメリカでも東部と西部は全然違うんです。この違いはなんだろうと興味を覚えました。この体験は自分が異文化に関心を持つきっかけになったような気がしますね。

道草のすすめ

大学生、高校生を含む若い方へ言いたいこと、それはレールからはずれることを恐れないで欲しいですね。

日本は「新卒一括採用」至上主義ですから、脇見をしちゃいけない、道草を食っちゃいけないと思っている人たちが

多い。それを承知の上で言いますと、若い方へは道草をしましょうと言いたいんです。大学を休学してもいいので就職する前の1年、半年でもいいから世の中がどうなっているのか見て「自分で考える」体験を是非やって欲しい。例えば本を読む。思想、文学、歴史…。大切なのはビジネス本、ハウツー本ではない本を読むこと。または杉並区の古い地図を見ながら昔はどうだったのだろうと思いをめぐらせながら散歩をするということや、昔のことを知っている方々の話が聞ける場所に身を置くとか。それらはボランティアでもいいし、バイトでもいい。身近なところからそのような機会を自ら作る大切なのです。20代は何をしてもいいと思うんです。とにかく一生懸命に取り組んでいけば、それは絶対に無駄にならないと。これから色々なことがあると思います。だからこそ人生のアプリケーション、是非自分で作って欲しいと思いますね。

取材を終えて

キャンベルさんは好奇心旺盛な方だった。のっけから杉並区をアメリカの都市に例えてみたり、ユーモア精神もたっぷり。意外な特技、それは「まわりの人が落とし物をする」とすぐにわかる」という。これは育った地区、ニューヨークで養われたものだとか。キャンベルさんは理由をジョークを交え、わかりやすく分析、解説してくれた。18歳から30歳までの教え子がいるキャンベルさんは「自分の人生のアプリケーションを作ることに若い人たちには挑戦して欲しい」。なるほど人生のアプリケーションを自分で作り自分の人生を自身で豊かにする。これってとても素敵な言葉だと思う。私も人生のアプリケーションを今から作れるのであれば今から挑戦したい。

注釈1: ニューヨーク・マンハッタン島南部(ダウンタウン)にある地域である。芸術家やデザイナーが多く住む町として知られている。

注釈2: 地下に埋設された、あるいは地表にあっても蓋(ふた)をした導水路。閉水路ともいう。排水、下水、用水などに利用される。